

# 第一一八話

## 藤原保輔籠居堀川院被誅事

『前太平記』上 卷第十八 三六〇頁から三六四頁より

[保輔脱獄し、堀川院に乱入す]

寛和三年、年号が改元して、永延元年となる。この時、碓井貞光に生け捕りにされた右京亮保輔は、寛和元年の夏から牢屋に入れられていたが、警備が少し手薄となっていたすきをついて、強い力で獄中を脱出して、もとのように洛外にて徘徊して、また昔なじみの悪党や盗人たちを三十人余り追従させて、永延二年六月、忠義公<sub>(壹)</sub>の御子息中納言藤原顕光卿のお住まいの堀川院<sub>(貳)</sub>に、夜中に乱入したのだった。ちょうど黄門は、即詠のお歌会で参内し、御留守であったので、警護する者

御当座の御会にて参内あり、御留守なりしかば、墓々しく防ぐ者も

も無かった様子で、奥方や御子息は驚き嘆きなさったのを、若侍たち五六人が色々

無かりし程に、御台公達驚き悲しみ給ひしを、青侍等五六人やうやうに

と武装申し上げ、屋敷裏の小門より逃げ出した。盗人たちは思いのままに乱入し

具足し奉り、後ろの小門より逃げ出でぬ。

て、重宝珍宝を片付けて、早く出ていこうとしていたのを、保輔が制止して言うこ

とは、「このように言う俺を始め、お前たちもこのような強盗の行いをして生涯を

「斯く云ふ某を始め、

御辺等も斯かる強盗を以て一生を

楽しむ身であるので、今後の命はなきものと悟り、山野を家とするところ、どこへ

楽しむ身なれば、

命は無き者ぞと意得、

山野を家とすれば、

何処へか

帰ろうとて、それほど急ぎべき用もなく、待っている者も身内にいない。と

帰らんとて、

さのみ指し急ぐべき様もなく、

待たるゝ者も持たず。

りわけこの家は、前の関白忠義公残した家で、富以外にも勝っている。愛想も無く

就中此家は、

前関白忠義公の跡にて、

富貴自余に超へたり。

人望なき

山中に帰るよりは、しばらくここに居座り酒を飲んで気を紛らせよう。そらそら」

山中に帰らんよりは、

少且く

此に居て酒飲みて慰まん。

其々」

と申し上げたところ、もともと無法の盗人たちは、確かにと同意して、まず門を閉

じて、台所を探して椀や飯を運んで置き、献酌の順番は気にせず、好き勝手に飲み

食らう。保輔は少し酔いながら申し上げたのは、「どうだお前たち。一年内裏を炎

「何にか旁。 一年内裏回祿せしに、

上させたが、円融法皇のご治世の時に、火を避けてこの堀川院にお出かけになり、

円融法皇御治世の時にて、

火を避けて此堀川院に行幸なり、

ここにある一段は高く、褥<sub>(参)</sub>をしき用意したところでございまして、天下の政を

是なる一段高く、

茵褥鋪き設けたる所に御座しまして、

万機の政を

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

執り行われたのである。過ぎ去った承平年間の将門は、下総国にてたくさんの功績

執り行なはれしなり。

去んぬる承平の将門は、

下総国にて余多の功を尽くし、

を残し、内裏を建設して自らを新皇帝と名乗ったが、すぎに貞盛に滅された。さあ

内裏に建てゝ自ら新皇帝と称じゝか共、

程なく貞盛に滅ぼされぬ。 倡や

一同、明日をも知れぬ命で、将門のように骨を折るよりは、このように美麗を尽く

面々 明日をも知らぬ命にて、 将門が如く骨を折らんよりは、 斯くまで美麗を尽くし

し装飾の整えられているところで、王の真似事をして気を休めよう。誰は関白、誰

補理儲けたる所にて、

王の真似して慰まん。

何某は関白、

それは三公 (肆)、大中納言」と言つて、保輔は例の褥の上にドンと座り、追従する

誰々は三公

大中納言」

盗人どもは、次々に着座して、宴は数時間に及び、笑壺の会であったのは、運の尽

きとは言いながらも、よく天狗がついたのであろうかと、不愉快でありながらもあ

能く天狗の付きたるにこそと、

苦々しくも浅猿けれ。

きれものである。

## 【保輔死す】

この時に、顕光卿の女官である、大貳の乳母<sup>(伍)</sup>は、利口な人で逃げていく道すがら下男一人を走らせて、「こういったことである。急いで兵を向かわせて撃退して差し上げなさい」と言って、左馬権頭殿へ伝言として送られた。その下男は、門を荒々しく叩いて、息を乱しながら申し上げた。ちょうど頼光の御前には、綱・季武がそろって控えていたので、「急いで参り向かってこれを制圧するのだ」と仰ったところ、すぐに渡部・ト部は、腹巻<sup>(陸)</sup>を手にとって荒々しく身につけ、その席からすぐに、部下をわずかに二十三人を引き連れて、堀川院へと馳せ参ず。「盗人たちのことであるので、きっと逃げてしまったのだろうか。討ち取れず取り逃がしては仕方がないことである」と急いだが、思ったよりも門戸は強く締めて、入ることの出来るすべもない。「これは不思議だ。書いていたことにもたがっている。もしかしたら嘘であったのだろうか」と疑わしく思ったが、聞き耳を立て内部の様子をうかがうと、どうやら人がいると思われて、大勢で笑う声が遠く聞こえる。「さてはまた逃げてはいなかったか」と言って、中に入ろうとするが、門を閉じている。関を上げて敵をひるませようとしても、これほどのことで、冷泉上皇のご邸宅の程近くで騒がしい振舞いをするのも相応しくない。どうにかして忍び込んで討ち取ろうとまず御所の四方を回って見ると、全ての門が固く閉ざしていたが、しかし（盗

門々固く関したれ共、

人たちは）事情を知らないので、家の人々が脱出なさった裏の小門はそのままで開

流石に案内を知らねば、

人々の出で給ひし後ろの小門は其儘にて開きたり。

いていた。「思った通りだ」と言って、二十五人の兵はここから忍び込んで中を見ると、盗人らは皆大床(漆)に並んで座って、宴がまだ途中であったが、あいさつも

会釈もなく

なく切っかけてかかったところ、盗人たちは驚き、「これはなんだ」と慌てふためく。

切っかけて懸かりければ、盗人共等は肝を消し、

保輔はほくそえみ、「若い公家どもの若侍や下男が、どれほどのことをしでかすの

「なま公家原の若党中間、何程の事をか仕出だすべき。

だろう。よい余興だなあ。そら討ち取れ」と命ずると、三十二人の盗人らは、刀の

好き肴ござんなれ。其討ち捕れ」

切っ先を並べ戦ったが、渡部・卜部を始め、優れた兵たちであるのもものともせず、薙ぎ伏せていき斬っていった。保輔は考えと異なり、配下を全て殺させたが、

保輔案に相違して、手の者悉く討たせつれ共、

その身は一箇所も傷を負わず、四方八方に切っかけて回る。渡部も卜部も生け捕りにし

其身は一所も手を負はず 四方八面に切っかけて廻る。 渡部も卜部も、慮りにせんとして

ようと考えて、わざと太刀を交えない。保輔は四天王と分かったところ、とても

態と太刀をも合はせず。 保輔は四天王と見てげれば、 とても

敵うまいと思い、太刀を（その身に）切り込み、俯せに倒れって死んでしまった。

叶ふまじきぞと思ひ、

太刀を呀へ、

覆に伏してぞ死したりける。

すぐにその首を打ち落とし、あちらこちらで殺された（盗人の）死骸を片付けて待機していたところに、検非違使の役所から官兵が二百騎余りでやってきた。渡部ト部は広庭 (捌) に大篝を三か所たかせて、門を開き官軍を招き入れ、「こうこのことで、大貳の乳母よりご使者があったため、頼光の郎等どもが素早く駆けつけ、このように対処してございます」と言って、すぐに保輔の首、並びに従った盗人たちの首を三十一切って並べて、頭を垂れて渡した。（その姿は）実に勇ましく見えた

色代してぞ渡しけれ。

誠に勇々しく見へたりけり。

のだった。そのため仰々しく装い、用意をしてきた官兵らは、刀を抜くこともなく、人のとった首どもを受け取って、使いの役所に帰った。その後は渡部もト部も、御所を守って待機していたが、短い夏の夜はすぐに明け、顕光卿の下男五人を招き入れて御所を明け渡したところ、重宝珍宝一つもなくなっていなかったの、黄門はこの上なく喜んで、綱・季武を始め、その配下たちは（それぞれの）手柄にそって形ばかりの引出物をお与えになったのだった。

剛臆に従ひて形の如く引出物をぞ賜びにける。

それほどに保輔は、悪党の見本として猛威を振るい、「袴垂」と異名で呼ばれたが、総じて追討の使者を向けられたことは十五回、牢に入ったことは三回に及んだが、毎回強い力で逃げおおせていた。しかし、運も尽き、時が来て、綱・季武の手で身を滅ぼしたので、四天王の威光をいっそう高く振るったのだった。



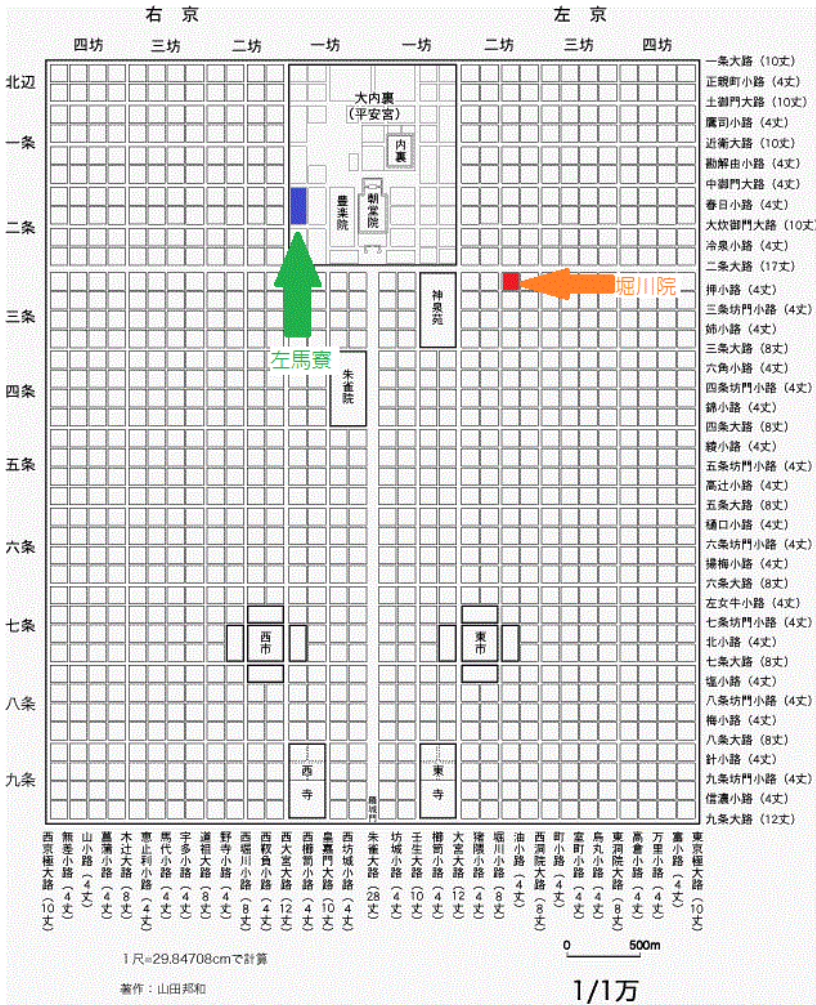
# 注釈

※壹・忠義公……藤原兼通（925～977）の諡号。

※貳・堀川院……京都堀川東にあった兼通の邸宅。『前太平記』107話の「内裏炎上事付大地震事」（2018/4/8時点未訳）にても登場。「一年内裏回祿せしに、円融法皇御治世の時」という保輔の台詞はこのときのこと。

「保輔死す」のトピックにおいて下男が頼光に助けを求めたのは左馬寮かと推測する。

<図1>



※こちらの図は「平安京探偵団 (<http://homepage-nifty.com/heiankyo/>)」様より拝借し、加工いたしました。(2021/2 修正)

※参・褥……座る時、寝る時に畳やむしろに敷く敷物。

※肆・三公……太政大臣・左大臣・右大臣のこと、もしくは左大臣・右大臣・内大臣。

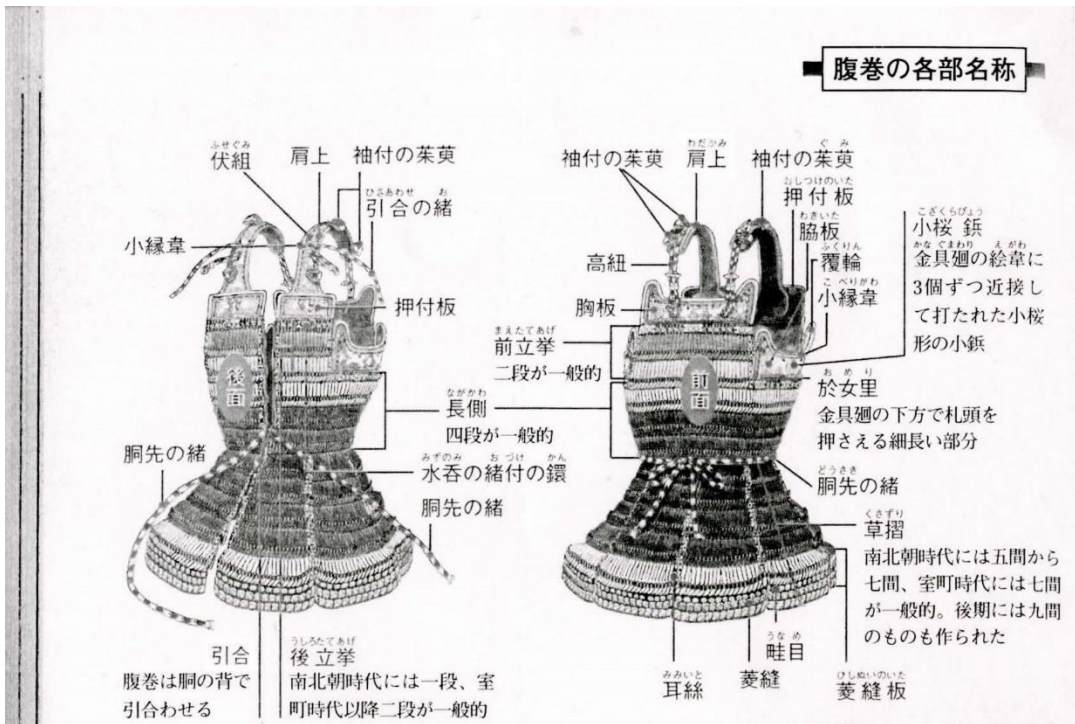
※伍・大弐の乳母……「大弐」は太宰府の次官。『源氏物語』にも同名の人物（光源氏の乳兄弟藤原惟光の母であり、光源氏の乳母の一人）が登場し、父親か夫が太宰府大弐であったことであるからの呼称と推測される

※陸・腹巻……徒歩戦で用いられた軽便な鎧。(以下図2参照)

<図2 腹巻について>

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

## 腹巻の各部名称



(笹間良彦監修・棟方武城執筆『すぐわかる日本の甲冑・武具』東京美術 2004年 71頁より引用)

※漆・大床……武家や寝殿造りの広いひさし(母屋の外側の細長い部屋)。

※捌・広庭……玄関先の広い庭。

保輔が自害しましたね。

ここで考えたいのはやはり背景に見え隠れする保昌の存在でしょうか。保昌は第108話で四天王たちと共に土蜘蛛を討伐し、その四天王に弟を捕えられ、四天王は弟の自害を止めることは出来なかった。そして、保昌が第110話で保輔に着物を与え見逃したことも、第111話で甥の斎明を謀殺していることも気になります。

次話の頼光の逸話にも保昌は登場しません。そこに彼の闇を私は感じるのです。

保昌はこの時どのように考えていたのでしょうか。そして、私は頼光・季武のことも気になります。

季武は父季国が満仲に仕え、頼光とは旧知の仲であることが第100話からうかがうことができます。保昌は頼光の身内です。おそらくは長い付き合いがあるのでしょうか。では、季武は保昌・保輔との交流もあったのではないのでしょうか。

そう思って今回の話を読み返すと、私には行間が薄暗く影って見えるのです。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL(月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>)をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※



感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m( )m

公開：2018/4/8

改訂：2021/3

海熊童子